# 男の夢を年輪に託す。

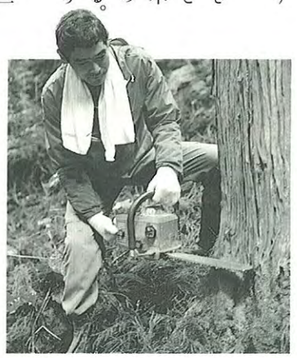
本渡市栫宇土町
原田　寅八さん（83歳）
　　寅雄さん（54歳）
　　幸雄さん（32歳）

ビシッ、ビシッ。冷たい山の空気を破って枝打ちの音が響く。雨上りの陽がこぼれる天草の空に、まっすぐに伸びる、スギとヒノキ。

その陰に、静かに受け継がれてきた男たちのロマンがある。膝丈ほどの苗木が大地に根づき、そして大木として山を降りるまで、半世紀以上の長い時間をかけて木を守り、育てる。植林はまさに、生涯をかけた男たちの夢だ。

天草、本渡市の中心から西へ約三キロ。山道を登ったところに森林の町栫宇土（はせうと）がある。この町に親子三代植林に取り組んできた原田さん一家の屋敷がある。原田家は、天正年間、未開のこの地に移り住み、一から切り開いてきた開拓者の血筋だ。

植林は、いわば投資の事業である。大変な長期戦だ。特に天草の木は成長が遅い。三、四十年で切り出せる産地もあるが、ここでは六十年以上もかかる。「たっぷり手間と時間をかけて育つから、目がつまった上質の木ができます。色が違うし、つやが違う。ヒノキはやっぱり天草ですよ」と幸雄さん。三十年前、寅八さんが植えたスギとヒノキを、三人で守り続けてきた。あと三、四十年、幸雄さんの次の代に、やっと切り出せる程の木になる。


幸雄さん

植林の大敵は、何と言っても天災。水害の時、植えたばかりの木が鉄砲水にあい、やっと造った林道にまですべり落ちたこともあるという。そんな時、何百万円かけて補修しても、何の見返りもない。経済的にも大変な仕事なのだ。

原田家の主な収入源は、苗木栽培と稲作。寅八さんの日課は、もっぱら山の草刈りや下払（したばら）い。時には、はしごを使って木に登ることもあるという元気さだ。「危ないから、と止めるんですが…。でも、じいちゃんがいてくれて助かります。」という息子さんたちに対し「間伐は息子たちしかできませんから、私は下払（したばら）いばしますたい。」と寅八さん。同じ山をいっしょに守る家族だけに仲がいい。

「これだけは、ほんとに好きじゃないとできませんね。」と笑う原田さん親子。「冬であればヒノキは赤味を帯び、スギの中には青味を帯びるものもあります。そんな山の姿を眺めながら、去年はここまでに伸びた。と、木の成長を見るのが楽しみですね。」と、植林の醍醐味を語る言葉からは、子供の成長を見守る親のような、木へのあたたかな愛情が感じられる。

親から子、子から孫へ。ひとりでは果たせない志が、次々に受け継がれていく。めまぐるしく移り変わる時代の中で、ここには、もうひとつの時の対流があるようだ。そのゆるやかな時間のなかで、原田さん親子の夢が静かに育っている。

寅雄さん

寅八さん